

2011年2月の“実記を読む会”で、岩倉使節団をめぐる三つの謎についての私見を発表しました。一つ目は、一般に流布している岩倉使節団の編成は、大隈重信が最初に企画したものを、後から岩倉が横取りしたという通説は本当かという疑問です。二つ目は、岩倉使節団派遣の12年前に、日米通商条約批准のために渡米した、万延元年の新見遣米使節団について、久米はなぜ実記の中で一言も触れていないのかという謎です。そして、三つ目は、久米は機密史官だったとの佐賀城本丸博物館長・杉谷昭氏の説について。

ここに、その私見を紹介し、皆様のご叱正を待ちたいと思います。

『大隈使節団構想は最初から無かった』

岩倉使節団編成にいたる経緯を考察した学説のほとんどは、岩倉使節団は、大隈重信が明治政府特別顧問フルベッキ氏が建策したフリーフ・スケッチに基づき、自らを団長としての大隈使節団を計画したが、種々の事情により、岩倉等にとって代わられたとされてきました。最近、鈴木英樹氏が、『岩倉使節団編成過程への新たな視点—研究史への批判と試論』を出版されてから、従来の学説の見直しが求められつつあります。

鈴木説によれば、政府首脳による欧米視察は岩倉具視が政治的頭角をあらわした最初の頃からの一貫した夢であり、主張であったということです。岩倉は、安政5年3月に、日米修好通商条約に反対して、公家達88人列参を実現して、政治家として台頭しましたが、その2日後に、孝明天皇宛に『神州万歳賢策』を提出します。その中で岩倉はこう述べます。「(条約を強要する米国のハリスに対しては)日本は千年来の大変革を迎えているが、我々は欧米のことをまだよく知らぬので条約締結に暫く猶予をくれと言って時間稼ぎをし、西洋ヨーロッパ各国に使節を立て、その風習を察し、その産物を視てから、決断しないと失礼なると言うべき」と献策している。更に、慶応3年には、兵庫開港勅許申請に際して建策した『済時策』の中でも、朝廷主導で、開国・航海の道を選ぶべし、そのためには〈アメリカ・ヨーロッパ諸国に勅使を派遣し、歴聘するのを第一とすべし〉と述べている。

また、明治2年2月には、『会計外交等の条条意見』の中で、〈外国すでに交際の礼を以って、公使参朝せし上は、我がほうよりもまた勅使を遣わされ、以って答えずんばあるべからず。且つ、条約を改むることを弁じ、倒幕の事情を報告するべきだ。是もとより、外交上の礼なり、先方から、請われる前に、派遣すべきだ〉と主張している。

これが鈴木説の骨子である。つまり、岩倉は、最初から、開国・通商は必然と見ており、そのために、諸外国をもっと知るための使節団を派遣すべきとの意見の持ち主であったことになる。だからと言って、大隈が、自分で使節団派遣を考えていなかったとは言えない。大隈は、晩年の回顧の中で、自らの使節団を考えていたとの記述もある。

では、なぜ大隈使節団構想は無かったと言い切れるのか。ここからは、私の推論が入る。

フルベッキのブリーフ・スケッチは、明治2年6月11日付けで大隈重信に提出されている。その後、派遣直前の明治4年10月26日と29日の二回に亘って改訂されて、それも大隈宛になっている。

岩倉が先述の『会計外交等の条条意見』で、使節団派遣を提案したのは、明治2年2月である。ブリーフ・スケッチに先駆けている。岩倉は、明治元年の暮れには、二人の息子・具定と具経の二人を、フルベッキが校長をする長崎の佐賀藩の英語塾・致遠館に遊学させている。フルベッキとは、すでに懇意の仲である。大隈は因みに、その致遠館の創設者・塾頭であった。フルベッキのブリーフ・スケッチには、明治2年の秋か冬に、天皇は条約締結各国に向けて、使節派遣の用意があると聞いているので、その指針になればこの提言書を書いたと述べている。時間的推移から考えると、恐らく、岩倉の意向を間接か直接に知ったフルベッキが、あるいは岩倉の示唆に応じて、ブリーフ・スケッチが作成されたと考える方が自然ではなかろうか。スケッチが大隈宛になっているのは、到遠館の塾頭を務めたこともある大隈に、岩倉が便宜上依頼したと考えられないか。或いは、大隅が岩倉の意向を知って、自ら頼んだ可能性もあろう。

回覧実記〈岩波文庫版I、402頁〉の解説のなかで、校注者の田中彰氏は、外務卿岩倉が、明治4年9月13日にフルベッキに会って、ブリーフ・スケッチについて教示を依頼し、現物を入手していると述べている。その旬日前には、岩倉は大隈に対し、2年前のブリーフ・スケッチの所在を尋ねている。2年前には、維新直後の混乱のなかで実現出来ずに、棚さらしになっていた使節団派遣の夢を、廃藩置県で一応の安定を見せ始めた機会に本格化しようと、このとき岩倉構想が再始動したものと考えられる。明治4年10月26日と29日に二回にわたり、ブリーフ・スケッチの改訂版が出されているのは、双方とも、大隅宛になってはいるが、岩倉の依頼に応じたと考えるのが妥当ではないか。

もともと、だから大隅が自らの使節団を夢見なかったとは言い切れない。しかし、大隅は自分が団長を務めるより、岩倉が団長のほうが全権大使として適任であることは、大隅は百も承知であったろう。大隅は、難局の留守政府を守れるのは、自分をおいてないぐらいの自負心と気概は、恐らく外遊意欲より勝っていたと考えるほうが自然に思える。

岩倉使節団派遣に際し、外遊組と留守組とのあいだに“外遊組の承諾なしに勝手な政策実施はできない”との契約書が結ばれた。これは通説では、外遊組が、残留の留守部隊の勝手を許さぬための“拘束する契約書”と解釈されているが、事実ではない。

この契約書を提案したのは、留守部隊の実務家・大隈重信と井上馨である。狙いは、自分の手足を縛るためではなく、圧倒的に国民的人気があり、実力者である西郷隆盛の暴走を懸念しただけである。実際に、大隈・井上は、外遊組に相談することなく、“鬼のいぬ間の洗濯”とばかり、ほぼ自由自在に、数々の政策を実現していたのである。そして、その政策も外遊組の意向とかけ離れたものは、ほとんど見当たらない。

大隈重信の85年の政治生命の中で、一番輝いて、得意な時期が、この留守政府時代である。西郷とも折り合いはよく、西郷は印鑑を大隅に預けて、ほぼ全権委任していた。

外遊組に木戸・大久保の大物が加えられたのも、維新直後、薩長閥跋扈に対する、他藩士族の猛反発があり、それをかわす目的もあったことも考慮すべきだろう。

岩倉使節団編成は岩倉の宿願であり、なるべくしてなった人選と考えた方が妥当だろう。

『なぜ、久米邦武は万延元年の遣米使節団について、何も触れていないのか』

ご承知の通り、岩倉使節団は、徳川幕府によって締結された各国との通商条約の改訂時期を翌年に迫り、その改定交渉を見据えての予備交渉または、各国の意向調査と、欧米列国との聘門の礼、欧米文明・文化・制度の視察調査等が目的であった。その意味では、実記からは、条約改定問題を除けば、猛烈に新文明を吸収しようとする使節団の貪欲な意気込みが、実によく伝わってくる。

だが、久米は12年前に派遣された、岩倉使節団以上に歓迎されて、サムライ・ブームを引き起こした万延元年の幕府が日米修好通商条約批准のために派遣した新見遣米使節団について、まったく触れていないのはどうしてだろう。これが私のもう一つ謎であった。

のちに史家となる、リアリストで博覧強記の久米が、新見使節団のことを知らなかったことは考えられない。ましてや、新見遣米使節団の結んだ不平等条約改正が、目的の一つであることからみれば、なおさらのことである。

岩倉使節団の一員には、万延元年使節団の時、米国でトミー・ブームを巻き起こして、新聞にトミー・コラムが毎日出たほどの人気者・立石斧次郎（長野桂次郎）が通詞として参加しており、さらに別動隊で派遣された“咸臨丸”で活躍した肥田為良も加わっているのである。久米は、なぜ万延の使節団を無視して何も触れなかったのか。

万延元年の使節団は、往復6ヶ月間、すべて米国側手配と費用の軍艦で、世界一周して帰ってきている。東洋のサムライを始めてみるという米国民衆の好奇心もあって、歓迎も熱狂的でフィラデルフィアでは、30万人（当時人口56万人）の群集が歓迎、ニューヨークでは、50万人が見物に押し寄せ、詩人ホイットマンはその状況を『草の葉』の中で、“ブロードウェイの進行”に謳っている。歓迎の規模だけでなく、滞在中に、日米初の通貨交渉が行われて成功したのを皮切りに、新見使節団のNO.3であった監察の小栗豊後守政順は、帰国後に、猛烈な勢いで、西洋文明の摂取のために、獅子奮迅の働きをしている。

彼は、ワシントン海軍造船所を見た、軍艦・大砲・武器などの流れ作業による工業力に啓発されて、帰国後に、幕府を説得して横須賀製鉄所（のち海軍造船所）を、初の西洋的経営組織を取り入れて、フランスの協力で立ち上げる。後年、日露戦争後、東郷平八郎をして、「小栗のお陰で、日露戦争は勝利した」と言わしめた。大隈重信は「明治の近代化は、みな小栗の構想の模倣である」といい、司馬遼太郎は小栗を「明治の父」と呼んでいる。

小栗は、米人がすでに定住していた小笠原諸島の奪還・回収を仕掛け、勘定奉行としてフランスの借款で、造船所を立ち上げ、幕府の兌換紙幣を三井の番頭・三野村利左衛門を通じ発行し、日本初の株式会社といわれる兵庫商社を企画し、大阪の豪商たちに出資を求

め、生糸貿易では、英蘭外国商人の言いなりにされて、日本の利益につながらなかった通商形態を、日本商人が主導で、利益を生める体制への切り替えを模索する。築地ホテルを民間資本で募集する。海軍奉行としては、すべての軍艦の国産に拘り、造船所を作り、陸軍奉行として、フランスの騎兵隊を導入、フランス語学校も横浜に開校した。もし幕府は倒れても、郡県制にして、大統領制への移行の構想も持っていた。のちの明治政府が模索し、実現する諸政策のほとんどを実践し始めていたのである。幕末に、西洋化を実践していた開明幕閣が存在していたことを、知らぬはずのない久米がなぜ無視したのか。

久米が、不平等条約を批准しに行った新見使節団を事挙げしたくない気持ちはわからぬではないが、まったく記述しないのは史家としての久米らしくない。欧米を見聞中も、江戸時代、江戸幕府に関する記述や、比較論もほとんど見られないのはどうしたことか。

小栗は、大政奉還の後の徳川慶喜に対し、徹底抗戦を主張する。倒幕派には、十分な資金がない。幕府には、まだ軍資金も大砲を備えた軍艦も豊富にある。朝廷軍に勝つ自信は充分にある。東上してくる、討幕軍を箱根の山に閉じ込めて、海から攻撃を加えれば幕府はかならず勝てると直訴したが、すでに大政奉還を決意していた慶喜の意志を覆すに至らず、反対に即刻辞職を命ぜられて、小栗は翌日には群馬の権田村へ蟄居する。

この小栗を見つけ出して、首を切ったのは中山道を江戸に向かった、東上征討軍で、その総督は岩倉具視の子息の岩倉具定、具経であった。

そんな経緯を考えてみると、恐らく、小栗の活躍した幕府遣米使節団のことも、倒したばかりの徳川幕府の長所・短所を記述することも、恐らくご法度であったろう。そこで、久米は、政治的発言はすべて記述しないことにしたのではないか。条約改定に関する各国とのやり取りも、同伴の理事報告に任せて、封印した。欧米の憲法、法律、政治システムなどを、そのまま事実としてのみに徹した。

これが、第二の疑問に関する、私の回答である。

『久米は機密史官だった』

本件については、米欧亜回覧ニュース（平成22年3月15日）の、佐賀城本丸博物館館長の杉谷昭氏の特別寄稿文で、ご紹介されている。岩倉具視は、使節団出発の七日前に、急遽、久米を起用したのは、自分の目耳となって見聞したことを委細漏らさず、書きとめて留守組政府と天皇に都度、報告することを目的としていたことが分る。

岩倉が、久米の起用を考えたのは、鍋島閑叟（直正）に二人の息子（具定、具経）の教育を依頼した際に、その面倒を見たのが久米であり、久米の近習としての優秀さを閑叟から聞いておったので思いついたのであろう。アメリカに行ってから、久米とタッグを組む記録係兼通詞として採用された畠山義成（杉浦弘蔵の変名で、幕末に薩摩藩よりイギリスへ留学、その後、森有礼や吉田清成と共にアメリカに渡り、ラトガース大学一岩倉の二人

の子息の留学先でもある一を卒業した)は、知遇のあった英国公使パークスの手紙による依頼で、アメリカで条約改正を進めるのは、日本にとって得策ではないとのパークスの意向を伝えに、岩倉使節団に接近していた。アメリカと条約改正交渉を始めて、天皇の委任状を取りに大久保と伊藤を帰国させていた岩倉も、畠山経由のパークスの意見や、その後、追っかけて訪米した英国代理公使アダムスやプロシア公使のフォン・ブランドの片務的最恵国待遇条項の指摘もあり、これ以上の交渉は不利と見て、木戸と相談して交渉打ち切りに傾くことになる。交渉がなければ、半年も滞在したワシントンを早々に発って、イギリスに向かうことになるが、その直前に、岩倉は改めて、久米と畠山を、帰国後に発刊を目指す公式の回覧実記の記録係として改めて任命することになった。大使付属枢密記録等取調と各国宗教視察が正式辞令であった。回覧帰国後の正式報告者としての久米の役割は、実はアメリカを発ちイギリスに向かう時に始まるのである。

それまでは杉谷昭氏が指摘のように、三条宛、岩倉書簡にある「発途前、俄に願立、久米某召連れ候、右は、機密史官の処に申付け、書記官に管せず、公私混交、聞見任せ、諸事書付致させ候、上のお慰めにも相成り候哉とご賢考次第、宜しく参議中は勿論、外務省副島・寺島等へ御見せ相願ひ候、出船指急候間、清書の暇是なく、草案の俛差し上げ候」と最初は、三条、天皇、留守参議達や外務の副島・寺島らへの見聞を、気楽に伝える報告書の書き手として、岩倉の私設秘書役だったようである。

会友の鵜飼直哉氏によれば、サンフランシスコに着いたばかりの久米の記述には、到着した喜びと安堵感、感激と感動、興奮と高揚感、使命感と好奇心に満ちた記述が続くが、正式に記録係を任命された途端に文章に、感動がすくなくなり、帰国命令がでた直後から再び感動と躍動する文章が復活すると、正式書記官任命前後の変化を読み解いている。

尚、フルベッキのブリーフ・スケッチは、出発直前まで、西回り一即ち、欧州を先行してからアメリカに渡り、世界一周して帰国するコースを勧めている。それが、米国が先になったのは、米国のデ・ロング公使が、自分が使節団に同行して、強引にアメリカ先行を誘導したと、英国のパークスやアダムスは、英国の影響力と面子を潰されたと、相当にやきもきしたようだ。フルベッキの意見書に従って、英国を先行していたら、条約交渉に入る愚挙はなかったことになり、予定通り、10ヶ月で回覧を終えたかもしれないと考えると、歴史のIFで、日本の維新政府の政策にどんな変化がありえたかを考えると興味深い。

以上